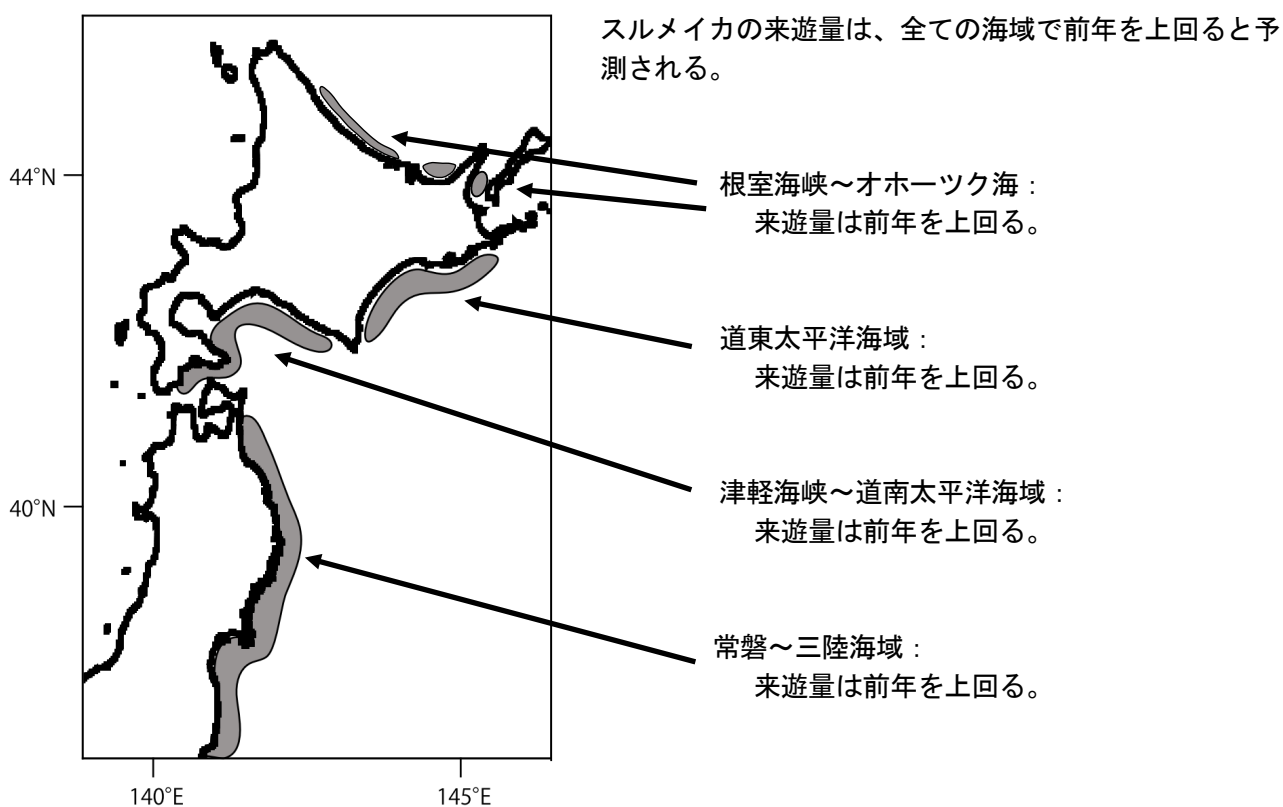


2025年9月30日
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2025年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2025年10月～12月)のポイント



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：浮魚資源部（横浜）大島、松井
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001
当資料のホームページ掲載先URL
<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2025 年度 第 2 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2025年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網、刺し網

対象魚群：主に冬季発生系群（2025年級群）

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- （1）来遊量：前年を上回る。
- （2）漁期・漁場：対象期間中の漁場形成は散発的となる。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、底びき網、定置網、刺し網）

- （1）来遊量：前年を上回る。
- （2）漁期・漁場：漁場形成は前年と同様に11月までとなる。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- （1）来遊量：前年を上回る。
- （2）漁期・漁場：対象期間を通じて漁場が形成される。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- （1）来遊量：前年を上回る。
- （2）漁期・漁場：対象期間を通じて漁場が形成される。

※ 魚体サイズについては、調査で漁獲されたスルメイカの尾数は前年を上回ったものの依然として少なく、また予報の対象海域の内、漁獲物のサイズ組成データが得られる海域も限られていた。このため、魚体サイズに関する情報が極めて限定的であることから、今年度は魚体の予報をとりやめとした。

I 予報の説明

2025 年 7 月～9 月に実施した漁場一斉調査とイカ類南下期資源調査¹⁾の結果（図 1～3；以降、いか釣り調査と総称する）、および 8 月（一部 9 月を含む）の漁況経過を主要な情報として太平洋における 10 月～12 月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域の全ての海域で前年を上回ると予測される。

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

この海域の漁獲対象魚群は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東周辺海域（42° N 以北、143° E 以東）におけるいか釣り調査の平均 CPUE（いか釣り機 1 台 1 時間当たり漁獲尾数）は、前年を上回った（前年は漁獲なし、図 1、2）。道東主要港における 8 月の水揚げは前年を上回った（前年は水揚げなし、表 1）。したがって、道東太平洋海域への来遊量は前年を上回ると考えられる。ただし、いか釣り調査の平均 CPUE は過去の推移の中でも低い水準にあることから、漁場形成は散発的になると予測される。

2. 根室海峡～オホーツク海域（いか釣り、底びき網、定置網、刺し網）

この海域の漁獲対象魚群は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。釧路以東（144° 40' E 以東）におけるいか釣り調査の平均 CPUE は前年を上回った（前年は漁獲なし、図 1、2）。釧路～羅臼周辺海域における 8 月の水揚げは前年を上回った（前年は水揚げなし、表 1）。北方四島周辺の太平洋側の海域における 8 月上旬以降の平均海表面水温²⁾は前年並で推移しており、10 月までの水温（図 4）³⁾も前年並と予測されている。したがって、スルメイカは太平洋からオホーツク海へ前年同様に回遊すると考えられ、いか釣り調査の結果から太平洋沖合を北上する群の来遊量も前年を上回ると予想されることから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年を上回ると予測される。オホーツク海沿岸の 10 月の予測水温は前年並であるため（図 4）、漁期は前年と同様の 11 月までと予測される。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

この海域の漁獲対象魚群は、津軽海峡～道南太平洋海域（41° N 以北、143° E 以西）に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡～道南太平洋周辺海域におけるいか釣り調査の平均 CPUE は前年を上回った（図 1、2）。大畑港と函館港における 8 月の小型いか釣り船 CPUE（1 日 1 隻当たり水揚量）は前年並であったが、函館港における 9 月上旬の小型いか釣り船 CPUE は前年を上回った⁴⁾（表 1）。このため、津軽海峡～道南太平洋海域における群の分布量は前年を上回ると考えられる。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を上回ると予測されている。以上の結果から、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年を上回ると予測される。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

この海域の漁獲対象魚群は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。三陸周辺海域（41° N 以南、143° E 以西）におけるいか釣り調査の平均 CPUE は前年を上回った（前年は漁獲なし、図 1、2）。青森県、岩手県の主要港での 8 月の小型いか釣り船 CPUE は前年を上回り、青森県、岩手県、宮

城県、福島県の主要港における9月上旬の底びき網による水揚量^{5, 6, 7, 8)}は前年を上回った(表1)。したがって、常磐～三陸海域における群の分布量は前年を上回ると考えられる。前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を上回ると予測されており、8月、9月上旬の本海域の水揚量も前年を上回っていることから、常磐～三陸周辺海域への来遊量は前年を上回ると予測される。

- ¹⁾ 北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。
- ²⁾ 気象庁の札幌管区气象台が公表している日別海域平均海面水温
(<https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/series/engan/engan.html>)
- ³⁾ 国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム(FRA-ROMSII)による予測水温 (<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/index.html>)
- ⁴⁾ 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ市況情報を基に集計。
- ⁵⁾ 八戸市水産事務所 (https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/suisanjimusho/1_1/1635.html) による水揚げ概況を基に集計。
- ⁶⁾ 岩手大漁ナビ (<https://www.suigi.pref.iwate.jp/>) による市況データを基に集計。
- ⁷⁾ みやぎ水産 NAVI (https://suisan-navi.pref.miyagi.jp/mizuage_top) による水揚げデータを基に集計。
- ⁸⁾ 相馬双葉漁業協同組合 (<https://www.soso-gyokyo.jp/market>) による市況情報を基に集計。

II 調査結果

8月～9月に実施されたいか釣り調査の結果、調査海域全体の平均 CPUE (いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数) は0.39尾であり、前年(0.02尾)を上回った(図1、2)。海域別に見ると、道東周辺海域では0.37尾であり、前年を上回った(前年は漁獲なし)。津軽海峡～道南太平洋周辺海域では0.95尾であり、前年(0.09尾)を上回った。三陸周辺海域では0.24尾であり、前年を上回った(前年は漁獲なし)。

津軽海峡～道南太平洋周辺海域における漁獲物の外套背長組成の最頻値は14cmにあり、前年(23cm)より小さかった(図3)。道東周辺海域と三陸周辺海域は前年漁獲が無かったため、前年と外套背長組成の比較ができない。

III 各海域の漁況経過

2007年～2015年の太平洋(根室海峡～オホーツク海を含む)における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2024年は1.3万トンであった(図5)。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2007年以降5万～10万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2024年は0.5万トンであった。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。

2024年10月～12月の常磐～三陸海域における漁獲量(生鮮)は3.2千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では1.4千トン、道東太平洋海域では0.5千トン、根室海峡～オホーツク海では0.1千トンであった(図6)。また、千葉県以南の海域での漁獲量は23トンであった。2020年～2024年の平均に対する比は、常磐～三陸海域では74%、津軽海峡～道南太平洋海域では57%、道東太平洋海域では77%、根室海峡～オホーツク海では10%、千葉県以南の海域では73%であった。

2025年7月～8月の太平洋沿岸域での水揚量²⁾(生鮮:速報値、一部未集計)は4.3千トンで、前年(1.6千トン)を上回った。そのうち、常磐～三陸海域の主要港では4.1千トンで、前年(1.3千トン)を上回った。津軽海峡～

道南太平洋海域の主要港の水揚量は一部集計中だが、現状では52トンで、前年（310トン）を下回った。道東太平洋海域の主要港では112トンで前年を上回った（前年は0トン）。根室海峡～オホーツク海では0トンで、前年同様漁獲がなかった。千葉県以南の主要港では67トンで、前年（10トン）を上回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

- ¹⁾ 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図5、図6を含めた漁獲量は全て推定値である。
- ²⁾ 水揚量は単純積み上げた数値。

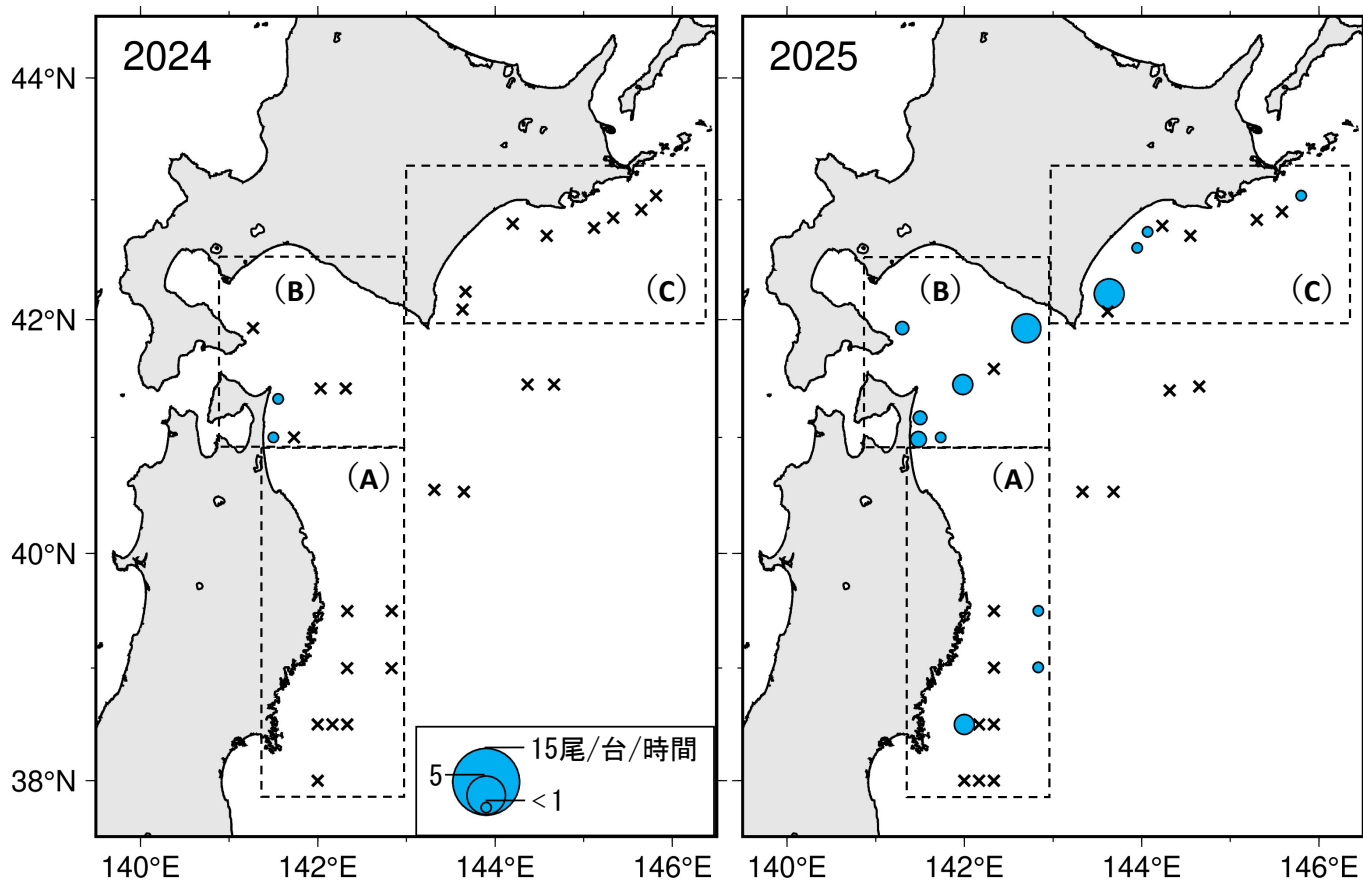


図1. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

2024年と2025年の7月～9月のいか釣りによるスルメイカのCPUEの分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す

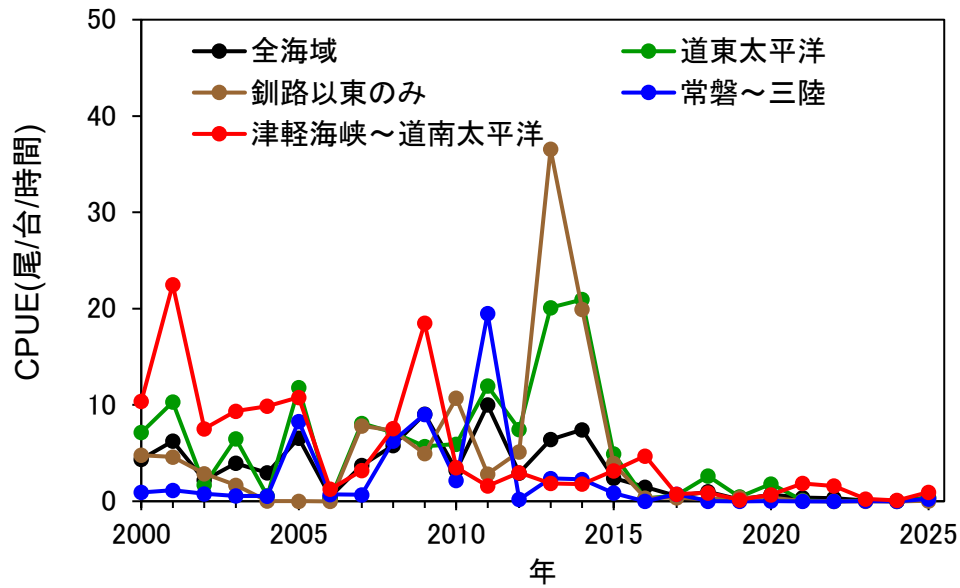


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

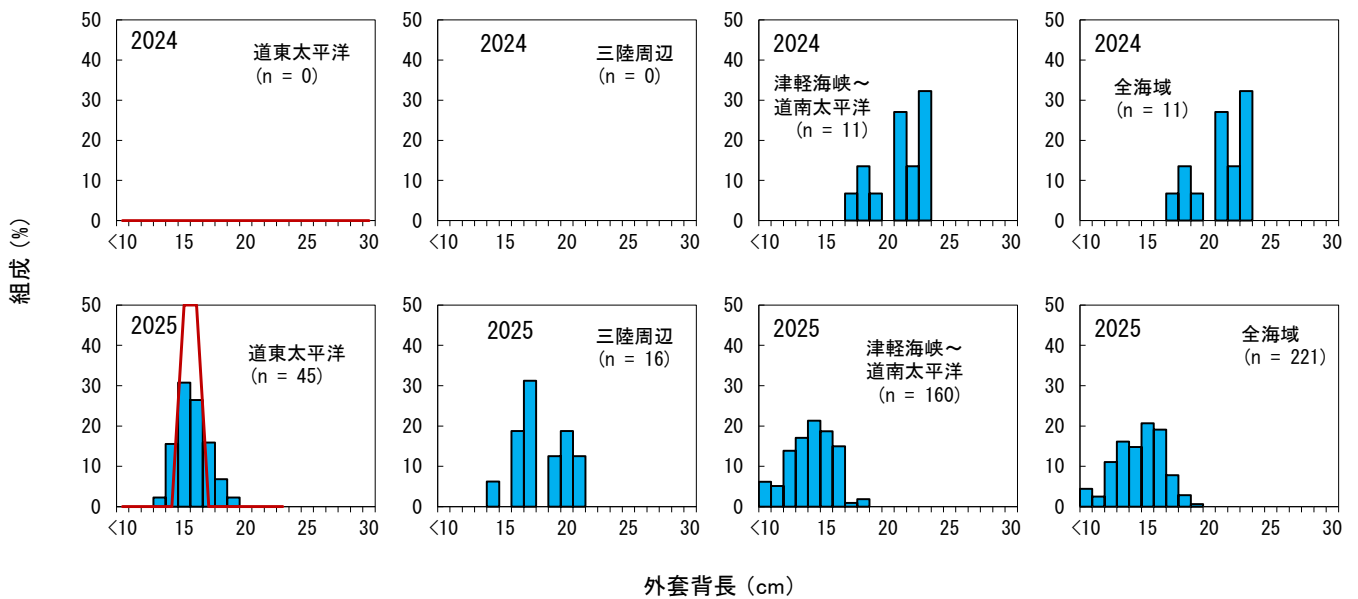


図3. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカ外套背長組成の結果

各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している

nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

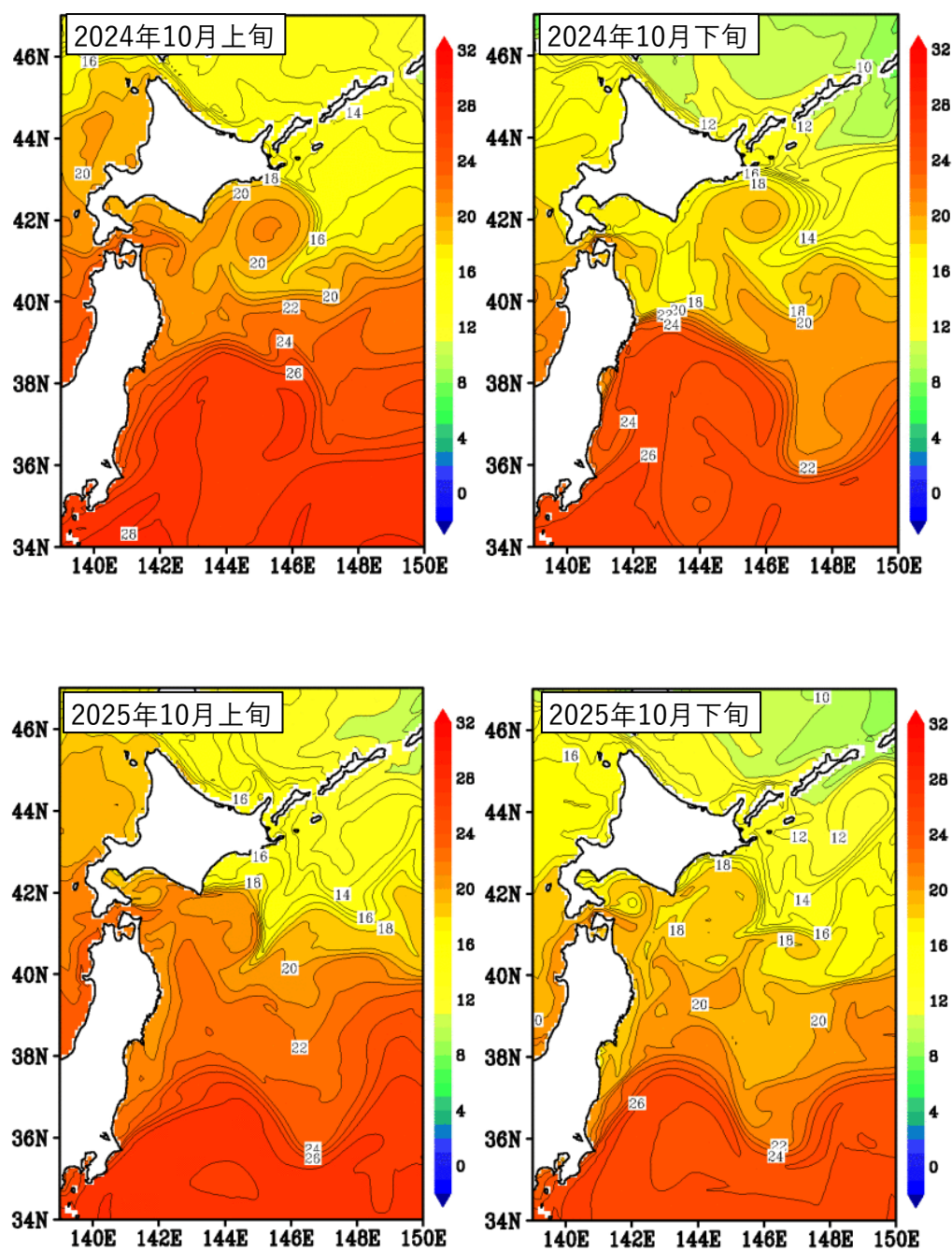


図4. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2024年、2025年の10月上旬と下旬の海表面水温
2025年は予測水温であり、2025年9月26日にHPより取得した

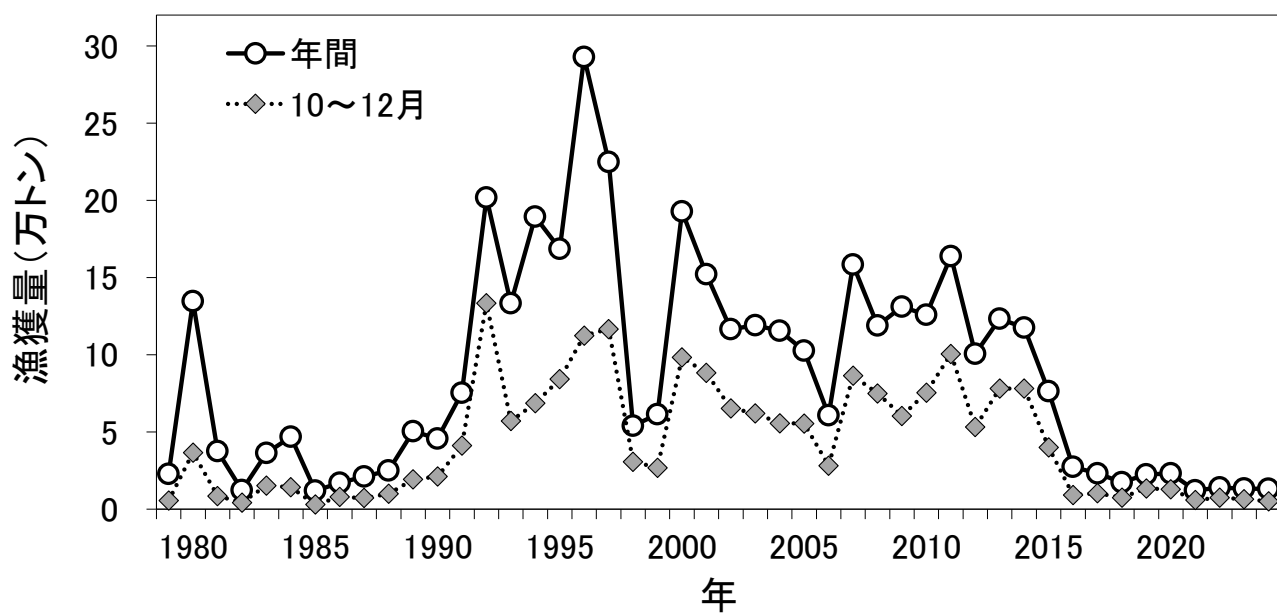


図5. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移

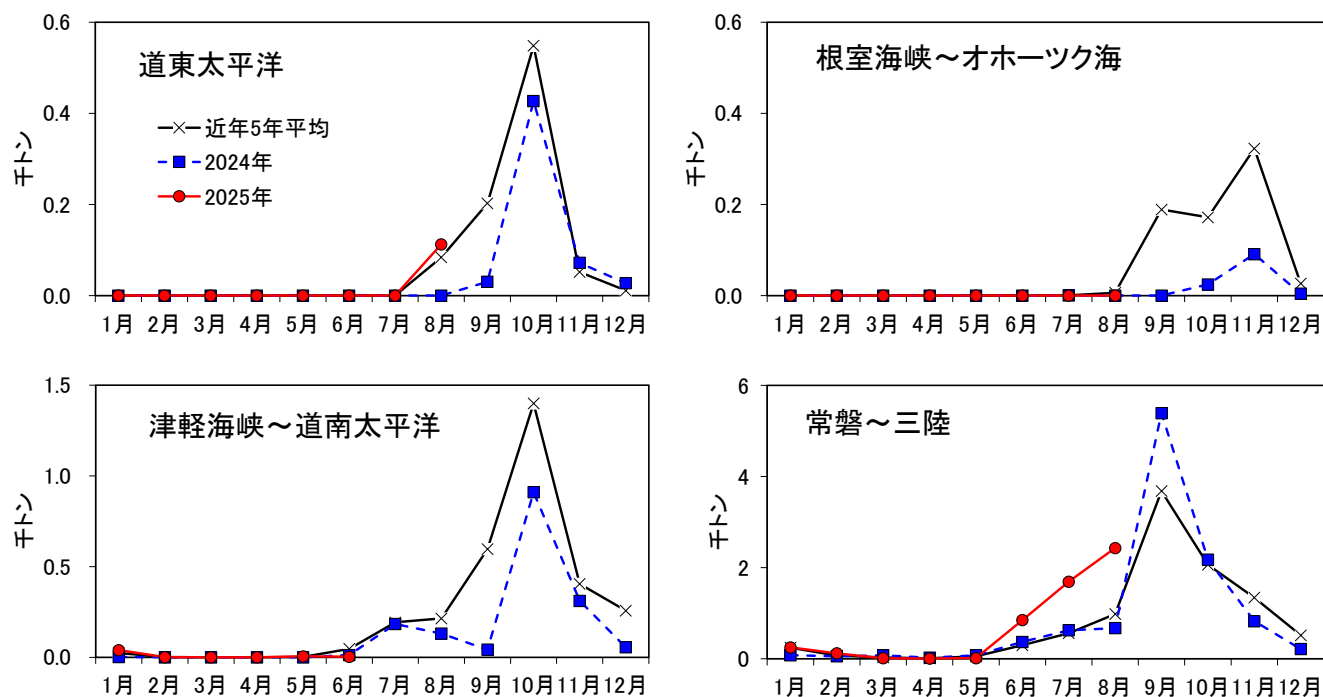


図6. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
近年5年平均は2020年～2024年の平均
（いか釣り・底びき網・定置網・まき網・刺し網）

表1. 漁況経過（2025年7月～8月、一部9月・未集計・暫定・推定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	太平洋側での初水揚げは8月18日（花咲港、釣り）で、前年（釧路港で9月14日、底びき網）より早かった。道東主要港での釣りによる8月の水揚げ量は95.5トンで前年を上回った（前年は水揚げなし）。 羅臼港では、9月20日に釣りと定置網による初水揚げがあった（前年は10月4日に釣りで初水揚げ）。
北海道 道南	函館港での釣りによる8月の水揚量は10.4トンで前年比89%、CPUEは前年比98%であった。漁業情報サービスセンターのスルメイカ市況情報によると函館港での釣りによる9月上旬の水揚量は3.3トンで前年比206%、CPUEは前年比299%であった。
青森	大畑港での釣りによる8月の水揚量は3.5トンで前年比48%、CPUEは前年比89%であった。 白糠港での釣りによる8月の水揚量は195.9トンで前年比802%、CPUEは前年比354%であった。 八戸港での釣りによる8月の水揚量は434トンで前年比404%、CPUEは前年比186%であった。 八戸港でのまき網による8月の水揚量は411.3トンであった（前年は25.6トン）。 八戸市水産事務所の水揚げ概況によると、八戸港での9月上旬のまき網による水揚量は2.3トン（前年は0トン）、底びき網による水揚量は1254.8トン（前年は1137.9トン）、いか釣りによる水揚量は264.9トン（前年は100.8トン）であった。
岩手	岩手県主要港での釣りによる8月の水揚量は619トンで前年比329%、CPUEは前年比304%であった。定置網による8月の水揚量は15トンで前年比68%であった。また、いわて大漁ナビの市況データによると、9月上旬の底びき網の水揚量は435.9トン（前年は325.2トン）、釣りによる水揚量は222.6トン（前年は84.3トン）であった。
宮城	宮城県主要港での釣りによる8月の水揚量は1.7トンで前年比118%、CPUEは前年比71%であった。定置網による8月の水揚量は0.5トンで前年比9%であった。底びき網による8月の水揚量は188トンで前年比153%であった。また、みやぎ水産NAVIの水揚げデータによると、9月上旬の石巻港への底びき網による水揚量は1050.9トンであった（前年は436.5トン）。
福島	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。相馬双葉漁業協同組合の市況情報によると、相馬原釜港での9月上旬の底びき網の水揚量は84.1トン（前年は37.4トン）であった。
茨城	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	主要港での釣りによる8月の水揚量は63kgであった（前年は水揚げなし）。
神奈川	間口港での釣りによる8月の水揚げはなかった（前年は11kg）
静岡	仁科港での釣りによる8月の水揚量は4.4トンで前年比5590%、CPUEは前年比610%であった。
三重	奈屋浦港でのまき網による8月の水揚量は14kgで前年比6%であった。
和歌山	すさみ港での釣りによる8月の水揚量は7.8トンで前年比375%、CPUEは前年比116%であった。
高知	主要港での釣りによる8月の水揚量は4.8トンであった（前年は水揚げなし）。

注：CPUEは1日1隻当たり水揚量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	静岡県水産・海洋技術研究所
	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産資源研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
茨城県水産試験場	
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	